

つくる責任・ つかう責任を考える

～持続可能な生産と消費のあり方とは～

第5回

大阪教育大学 連合教職実践研究科

鈴木 真由子 (すずき・まゆこ)

はじめに SDGsと消費生活

SDGsは、地球上のすべての人々の現在および未来の課題について、グローバルな視点で解決を目指すものである。中でも、目標12『つくる責任・つかう責任』は、消費生活との関連が強い。

目標12の解説に「持続可能な消費とライフスタイルについて消費者を教育すること」が含まれている点は、注目に値する。学校教育において、ライフスタイルを扱っている家庭科では、今の生活を振り返り、本当にそれでよいのかクリティカルに問い直し、持続可能な社会を構築するための新たなライフスタイルを創ることを目指している。

大阪の【始末の料理】

2013年度下半期に、NHK連続テレビ小説『ごちそうさん』が放送され、大阪(関西)の【始末の料理】が登場した。食材の価格には関係なく、いかに無駄にせず余すところなく食材を使い、おいしく食べつくすか、知恵を絞って創意工夫する。これが【始末の料理】であり、単なる節約あるいはケチとは異なる暮らしを支える倫理観である。

「始末の心」は、計画性と合理性に基づき、持続可能な暮らしを追求するライフスタイルそのものである。言い換えれば、使い切ることができないものを手に入れたり、つくったりする行為は、「始末の心」に反するのである。限りある資源をいかに有効活用し、無駄を省き、ごみを減らす(無くす)か、という課題への取り組みは目標12と同義であり、地域性を踏まえた伝統的な消費マインドと言えるよう。

循環型経済への移行と 責任ある生き方

令和5年版『環境白書』によれば、「資源・製品の価値の最大化を図り、資源投入量・消費量を抑えつつ、廃棄物の発生の最小化につながる経済活動全体の在り方」を強調した循環(型)経済が、国際社会共通の課題として位置付けられている。

る。

地球の有限な資源を長期にわたって守り、状態を維持しつつ、廃棄物ゼロを前提にした生産活動による循環型経済システムへの移行は、「始末の心」との親和性が高い。

ここで、キーワードとして「責任ある生き方(Responsible Living)」を挙げたい。消費者教育の課題は、まさに責任ある生き方(ライフスタイル)を主体的に実現させる消費者市民を育成することに他ならない。

つくる側の企業活動もまた、持続可能な社会の実現に向けた担い手の一部である。既製服メーカーによる製品素材・パッケージの見直しや不用衣類の回収は、循環型経済における責任ある生き方の一環と言えるよう。

おわりに

Ｚ世代から全世代へ

Ｚ世代の消費行動には、「モノ消費」より体験を重視する「コト消費」、仲間とともに過ごす「トキ消費」への関心が高く、フリマアプリを活用した売買に抵抗がなく、また、個人所有へのこだわりがないため、レンタルやリースで入手したりシェアしたりするといった特徴があると言われている。学校における消費者教育は、こうしたＺ世代の消費マインドを踏まえ、次のα世代へつなげる必要がある。

目標12の達成は、学校のみならず、すべての世代を対象にした消費者教育において、循環型経済や「始末の心」に通じる責任ある生き方、新しいライフスタイルの創造を目指すことで、実現に近づくと考える。

新たなライフスタイルを創る、責任ある生き方を目指して

